新刊紹介

東大寺史研究所編『東大寺要録』1

遠藤慶太

このたび東大寺が企画した「東大寺叢書」の第一として、『東大寺要録』1が公刊された。高精細フルカラーによる影印版の刊行スタートである。

平安時代末期に成立した『東大寺要録』は、日本有数の寺院・東大寺の創建にはじまり、法会・教学や伽藍、歴代別当や荘園・末寺をまとめた総合的な寺誌である。古代史でいえば、大仏の鋳造過程・開眼供養の準備などは『東大寺要録』の記載によってはじめてその詳細をたどることが可能で、奈良時代の寺院史・仏教史にとって欠くことができない。

ただ『東大寺要録』の記載には歴史的な層があり、最終的には中世東大寺の視点でまとめられている。成立も複雑で、嘉承元年(一一〇六)孟秋の序があり(撰者は未詳)、長承三年(一一三四)の観厳(生没年不詳)による再編集を経て現在の十巻構成になっている。おもな写本には、十三世紀に寛乗(聖守)が書写した醍醐寺本(巻第一・二のみ)、十五世紀に順円が書写した東大寺本(巻第二を欠く九冊)がある。このたび『東大寺要録』1として刊行されたのは、醍醐寺本・東大寺本の巻第一・第二で、巻子装の醍醐寺本は紙背文書も収録された。

われわれはこれまで、『東大寺要録』といえば筒井英俊編『東大寺要録』(全国書房、一九四四年)の恩恵に浴してきた。近年では時代や分野を横断して奈良・平安期の東大寺に関するすぐれた研究が公表されている(筒井寛秀監修『東大寺續要録』国書刊行会、二〇一三年。栄原永遠男ほか編『東大寺の新研究1 東大寺の美術と考古』法蔵館、二〇一六年など)。かかる状況にあって、なにより根本になる『東大寺要録』の影印版が刊行される意義はきわめて大きい。容易には閲覧できない写本二種が鮮明な画像で公開されることで、良質な写本に立ち返って『東大寺要録』を検討し、中世の寺誌としての息吹を体感することができる。今後の東大寺史研究は、この影印版を出発点に新たな可能性を開いてゆくことだろう。

あわせて古典籍を中心に影印版が刊行されることの意味についても述べておきたい。学術書籍をめぐって出版の環境が変化するなかで、影印版は紙による出版が果たすひとつの使命のようにも思える。影印版の刊行は紙本墨書というきわめてデリケートな史料を現状で記録・保存する意義をもつ。戦災で失われた典籍について、今や影印版が研究の基礎となっている例さえある(佐藤達次郎『東大寺諷誦文稿 華厳文義要決』一九三九年など)。その意味でも、『東大寺要録』の影印刊行は、所蔵者・出版社・研究者が息を合わせて史料を未来に伝える使命を果たしている。

本書は三分冊で計画されている第一冊である。おそらく第三冊には『東大寺要録』の内容、写本の書誌について、最新の知見が盛り込まれた解題が収録されるはずである。学界の期待は大きい。はやる気持ちをおさえながら、『東大寺要録』の続刊、また東大寺叢書そのものの刊行進展を見守りたい。

(二〇一八年一二月刊、三七〇頁、法藏館、三〇〇〇円+税)